

第47回 「個性ある図書館」展示

江戸の教育



正徳4年(1714)の『寺子教訓書』には、読み書きは人間が万用を達するための根元であり読み書きのできない者は木や石や畜類と同じであると記されています。また、勉強をしっかりと、喧嘩をせず、きちんと挨拶するようになるなど、しつけに役立つとも記されています。儒学者の貝原益軒が宝永7年(1710)に記した『和俗童子訓』には、小さい内からしっかりと教育すること、そして発達段階に応じた教材を使い、最終的には小学、四書、五経という儒教の基礎を勉強させるべきと述べています。

明治維新後、日本が急速に近代化をなしたのが、高い水準にあった江戸時代の教育が根底にありました。江戸時代の子どもたちがどのような教育を受けていたのか紹介します。

展示期間：2019年2月23日(土)～2019年4月25日(木)

展示場所：鷺宮図書館 5階「個性ある図書館」展示コーナー

〈江戸時代の教育の考え方〉

江戸時代は士・農・工・商の身分制度が確立していた封建社会であり、特に武士と武士以外の庶民（農・工・商）は厳格に区別され、大きく2つの階層に分かれていました。教育についても、基本的には武士の教育と庶民の教育が、それぞれ独自の形態をとって成立していました。諸藩により事情が異なっていましたが、身分だけでなく、性別によっても受けられる教育の制限がありました。

武士の教育

封建社会における武士は学問を学び教養をつむべきものとされ、教育が次第に組織化されていきました。各藩の藩主は儒学者や兵学者を招聘し自らの教養を高め、重臣たちにも学ばせていました。一般の藩士にも学問を奨励し、武芸のみならず教養をつむことを求めました。特に武士は儒学を学ぶことが好まれました。儒学は基本的に主家への忠義や親への孝行など人の上下関係を学ぶ学問です。



庶民の教育

封建社会の中、庶民の教育はまず庶民としての道徳が求められました。庶民の日常生活に必要な教養が家庭生活および社会生活の中で教育されました。当時は、徒弟奉公や女中奉公などの奉公生活、また若者組などの集団生活が広く営まれ、その中で地域や生活上の規律や道徳を学んでいました。



女子の教育

基本的に女子は学問による高い教養は必要がないものと考えられ、女性としての心得や行儀作法を身につけることを求められました。女子教育の主たる裁縫、しつけは家庭内で教育されました。中流家庭以上の娘は、読み書きの他に舞やお花なども習っていました。一般には封建社会における家庭の中の女子として、また妻としての教養が重んじられました。



これらの考えを基に封建社会の中で教育が発展していきます。そして江戸時代の中期以降、徐々に教育機関が姿を現し、発展していきます。

出典：『図説 江戸・幕末の教育力』 洋泉社

『江戸の人と身分 4 身分のなかの女性』 藪田 貴・柳谷 慶子／編 吉川弘文館

『日本人を作った教育』 沖田 行司／著 大巧社

『絵でみる 江戸の女子図鑑』 善養寺 ススム／文・絵 江戸人文研究会／編 廣済堂出版

〈江戸時代の教育機関〉

江戸時代に義務教育制度はありませんでした。それにも関わらず、日本の識字率は世界一だったそうです。義務教育制度がないにも関わらず、これだけの水準に達したのは、長年平和な時代が続き、人々の生活に余裕があったということだけでなく、この時代に教育機関が充実していたことに起因します。江戸時代中期～幕末にむけて発展していった教育機関をいくつか紹介します。

寺子屋（手習所）

主に寺院などで、町人の子どもたちに読み書き・計算などを教えた学問施設を、上方では「寺子屋」、江戸においては「手習所」「筆学所」などと呼んでいました。寺子屋は私立で、幕府の直接関与はなく、読み書きに自信があれば、誰でも開業出来ました。寺子屋の先生は、初期には僧侶が一般的でしたが、後期には浪人、医師、村役人などがなりました。当時全国で5万以上の寺子屋があったと言われています。入学金や授業料は微々たる物で、無料で行っていたところも稀にあり、基本的に読み書きを教えていました。男子がほとんどでしたが、時代が進むに連れ女子も増えていきました。

藩校

藩校は藩（大名）が藩士（家臣）とその子弟を教育するために開かれました。武士が真の藩士となるための教育機関であり、武士の子弟は強制的に入学させられました。幕末に向かうにつれ、庶民の入学も出来るようになっていきました。生徒は武芸はもちろん、藩が招いた儒学者などの学者から四書五経（四書は「論語」「大学」「中庸」「孟子」、五経は「易経」「書経」「詩経」「礼記」「春秋」）の素読、習字などを習いました。明治以降、廃藩置県により廃校になりましたが、各地の旧制中学校は藩校を母体になっているものが多いそうです。有名な藩校に、明倫館（長州藩）、弘道館（水戸藩）、昌平坂学問所（幕府直轄）などがあります。

私塾

学識や志のあるものが私的に開いた教育機関であり、江戸後期から幕末にむけて、とても盛んになりました。寺子屋同様、幕府や藩の禁令に触れなければ、誰もが塾を開くことが出来ました。そこで学ぶ学問は塾によって異なり、儒学、国学、蘭学など多岐に渡りました。入学する生徒も身分や藩を越え、経営する先生の学問や志に賛同する人達が集まりました。主な私塾に、吉田松陰が開いた松下村塾、緒方洪庵の適塾、勝海舟が幕府に進言して設立した神戸海軍塾などがあります。

出典：『図説 江戸・幕末の教育力』洋泉社 『藩校と寺子屋』石川 松太郎／著 教育社

『日本人を作った教育』 沖田 行司／著 大巧社 『江戸の教育力』 高橋 敏／著 筑摩書房

おすすめ展示図書

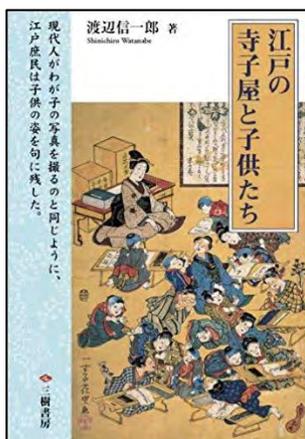


『図説 江戸・幕末の教育力』

洋泉社

請求記号：372.1 ズ

幕末の日本は世界でも有数の教育大国でした。寺子屋、藩校、私塾、これらの江戸の学び舎ではどのような教育が行われていたのかを、分かりやすく解説しています。



『江戸の寺子屋と子供たち』

渡辺 信一郎／著 三樹書房

請求記号：372.1 ワ

江戸時代に詠まれた川柳をもとに、江戸時代の子どもの様子、特に寺子屋での様子が説明されています。



『絵でみる 江戸の女子図鑑』

善養寺 ススム／文・絵

江戸人文研究会／編 廣済堂出版

請求記号：384.6 ゼ

江戸時代の女性の日常生活を、錦絵調のイラストと共に、とても華やかに分かりやすく説明しています。

展示図書リスト

このリストのほかにも多数取り揃えております。ぜひ展示コーナーへお立ち寄りください。

書名	著者名	出版社	請求記号	出版年
藩校に学ぶ	藁科 満治	日本評論社	372.1 エ	2018
考える江戸の人々	柴田 純	吉川弘文館	210.5 シ	2018
和算への誘い	上野 健爾	平凡社	419.1 ウ	2017
江戸時代年鑑	遠藤 元男	雄山閣	R210.5 エ	2017
江戸の親子	太田 素子	吉川弘文館	384.4 オ	2017
こどもと声に出して読みたい「童子教」	齋藤 孝	致知出版社	375.9 サ	2013
藩校・私塾の思想と教育	沖田 行司	日本武道館	372.1 オ	2011
江戸の子供遊び事典	中田 幸平	八坂書房	384.5 ナ	2009
江戸の躰と子育て	中江 克己	祥伝社	385.2 ナ	2007
江戸の教育力	高橋 敏	筑摩書房	372.1 タ	2007
江戸の子どもの本	叢の会	笠間書院	913.57 エ	2006
江戸の寺子屋入門	佐藤 健一／編	研成社	372.1 エ	1996

★江戸時代の子どもの遊び★

現代の子どもの様にゲームもスマートフォンもない江戸時代の子どもはどのようなことをして遊んでいたのでしょうか？いつの時代も子どもは遊びの天才です。江戸時代もそれは同じ、四季豊かなこの国で季節にあった様々な遊びがあったそうです。江戸時代の子どもが夢中になった遊びのいくつかは現代にも残されています。

男の子の遊び（男の子は主に外で遊んでいました）

凧揚げ、双六、雪合戦、竹馬、水鉄砲、相撲、べえ独楽、鬼ごっこ、かくれん坊、セミ捕り、影ふみ、太鼓、魚とり、トンボ捕りなど



女の子の遊び（女の子は主に家の中で遊んでいました）

ままごと、お手玉、かるた、影絵、福笑い、あやとり、姉さんごっこ（姉様人形という紙や土で出来た人形遊び）、おはじきなど



出典：『江戸の子供遊び事典』中田 幸平／著 八坂書房

「江戸の教育」について調べるには

図書館の資料の調べ方、インターネットを活用した調べ方についてご紹介します。

1 【情報探索のキーワード】効率的な情報検索には、適切なキーワードが必要です。

寺子屋	私塾	藩校
和算	幕末	手習い
儒学	教育	江戸

2 【基本的な情報源】辞書・事典類でテーマについて基本的な情報を入手しましょう。

資料情報	請求記号	配架場所
江戸時代生活文化事典（上・下）	R382.1 ナ	中央図書館
図解江戸の暮らし事典 決定版	210.5 ズ	鷺宮図書館

◎中央図書館では、育児に関する統計や白書を所蔵しています。

資料情報	請求記号
子ども白書 2018 日本子どもを守る会／編	R369.4 コ
子供・若者白書 平成30年版 内閣府／編	R367.6 コ

3 【図書を探す】

●館内所蔵を探す

◎ テーマの棚に行って探す

図書館の本は主題ごとに棚に並んでいるので、請求記号の最初の数字を参考にして同じ主題の本を探すことができます。

分類	分野	分類	分野	分類	分野
210.5	江戸時代	372	教育史	380	風俗習慣

◎ 中野区立図書館利用者用検索機（OPAC）で探す。

資料のタイトル、著者名、出版社名などから、中野区立図書館所蔵の資料を検索できます。

中野区立図書館のHP <http://www3.city.tokyo-nakano.lg.jp/tosho/>

中野区立図書館 HP（携帯版） <http://www3.city.tokyo-nakano.lg.jp/tosho/i/>

● 東京都内公立図書館で所蔵されている図書を探す。

◎「東京都立図書館統合検索」 <http://www.library.metro.tokyo.jp/>

● 国内で刊行されている図書を探す。

◎「国立国会図書館サーチ」 <http://www.ndl.go.jp/>

◎「Books.or.jp」 <http://www.books.or.jp/>

国内で発行された入手可能な書籍が検索できます。出版社のホームページやオンライン書店へのリンクもあります。

4 【オンラインデータベースで調べる】

中央図書館では、参考資料コーナーの利用者開放インターネット端末で、以下のデータベースをご利用いただけます。

データベース	収録期間と主な内容
官報情報検索サービス	1947年5月3日から当日までの官報記事の検索
日経テレコン	1975年からの日経4紙（経済・産業・金融・流通）の記事
聞蔵Ⅱビジュアル	1879年から1999年までの朝日新聞紙面イメージ 1985年から当日までの新聞の記事 ほか
MAGAZINE PLUS	一般誌・総合誌の雑誌記事検索や学術論文
WHO PLUS	歴史上の人物から現代の人物まで約32万人のプロフィール
D1-Law.com	判例情報、法律の改廃記録、法律判例文献情報 など

5 【インターネットを利用する】

●中野区の教育関連情報を知る

◎中野区子育てナビ

<http://tokyo-nakano-city.mamafre.jp/>

◎中野区ホームページ> くらし・手続き > 子ども・教育

<http://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/guide/003/index.html>

●江戸時代の教育について調べる

◎文部科学省

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317577.htm

◎江戸時代 Campus

<http://www.edojidai.info/>

◎松下政経塾

<https://www.mskj.or.jp/report/45.html>



江戸時代の数学 ‘和算’

和算とは江戸時代に発達した日本独自の数学です。当時は算法と呼ばれていました。江戸時代以前の数学についてはほとんど資料がないため、あまり多くのことは分かっていません。日本の数学は飛鳥時代に中国の数学書「九章算術」が入ってきたのが始まりだと言われています。室町時代中期にそろばんが日本に入ってきたのがきっかけで日本の数学は徐々に発展していき、江戸時代に入ると飛躍的に発展しました。特に江戸後期の数学ブームが和算の発達に拍車をかけ、江戸時代の人達はそろばんや暗算が得意で現代人も及ばないと言われています。しかし明治時代になると西洋の数学が日本に入って来て、和算は教育現場から消えていきます。

現在、日本が世界有数の数学大国になったのは、和算が原点にあったからとも言われています。みなさんも一度は聞いたことのある鶴亀算やねずみ算は和算のひとつです。今ならXやYの方程式で簡単に答えを求めてしまうでしょう。方程式のなかった江戸時代は仮定の話からその答えを求めていきました。

鶴亀算（異なる動物がいて、動物の総数と足の総本数がわかっている時、それぞれの動物の数を求めるような問題です）

（例問）

鶴（頭1・足2）と亀（頭1・足4）が合計32匹、お店にやってきました。足の数は94本です。さて鶴と亀はそれぞれ何匹でしょうか？

（答）

まず、全部鶴だと考えてみます。そうすると足の数は64本（32匹×2本）で30本（94本-64本）足りません。30本を鶴（2本）と亀（4本）の足の差2本で割ると15になります。これが亀の数となり、鶴の数は32匹から15匹を引いた数17匹となります。

ねずみ算（ねずみ算とはある一定期間にねずみがどれだけ増えるかということを経算する問題です）

（例問）

ねずみの夫婦がお正月に12匹の子どもを産みます。そうすると親子合わせて14匹になります。2月にこの14匹が7組の夫婦となり、それぞれ12匹の子どもを産むと98匹になります。このように毎月子どもを産むとすると、12月にはねずみは何匹になっているのでしょうか？

（答）

月に増えるねずみの夫婦は7組（14匹）なので、1月は7組（14匹）、2月は $7 \times 7 = 49$ 組（98匹）となり、前月の組数に7を掛けていくと、12月は13,841,287,201組（27,682,574,402匹）となります。

出典：『江戸の数学教科書』桜井 進／著 集英社インターナショナル
『江戸の「算」と「術」』佐藤 健一／著 研成社